

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院東面回廊の調査（飛鳥藤原第200次調査）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的にこなっています。本年度は、東面回廊の詳細な構造と内庭部の様相解明を目的として、2019年4月22日より、大極殿の東側約1,180㎡を対象に発掘調査を実施しています。

大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が調査をおこなっており、大極殿院の四辺が回廊で区画されていることなど、その主要な構造をあきらかにしています。その後、奈文研の調査によって、これらの回廊が3列の柱がならぶ複廊構造であること、桁行7間、梁行2間の東門が大極殿の東側に存在したことなどがわかっています。一昨年度の調査では、東面回廊と北面回廊が接続する東北隅部の調査をおこない、東面回廊が複廊のまま北面回廊に接続することがあきらかになりました。しかし、東北隅部から東門にいたる範囲の回廊の詳細な構造については、検討の余地が残っています。今回は、東面回廊の柱配置や柱間寸法、東門と回廊の接続状況の解明など



調査区全景（北東から）

を課題として、調査に取り組んでいます。

調査は春から実施し、現在は、史跡整備にともなう盛土や、都が移った後に営まれた水田の床土を取り除いたところです。その過程で古文化研究所の調査区を確認しました。合計4基、2列分の根石が検出されており、その他にも根石を探したと思われる掘り込みが複数確認されました。また、床土の下には大量の瓦が堆積していました。東面回廊の基壇裾付近に特に集中することから、回廊に使用されていた瓦が投棄され、堆積したものと考えられます。現在は、藤原宮期の遺構の本格的な検出作業を進めており、徐々に回廊や基壇の様相があきらかになりつつあります。

いっぽう、1977年におこなわれた内庭部の調査では、大極殿の北方で東西掘立柱列が見つかっています。遮蔽施設と考えられていますが、その全容と性格ははっきりしていません。今回の調査区ではその東側の延長部分を検出しつつあります。また、昨年度の大極殿院北部の調査では、内庭に敷いた礫の上に再び礫を敷き直すという工程があきらかになりました。さらに、北面回廊をつくる際に掘られた排水溝も複数みつかっています。こうした内庭の整備状況や大極殿院の詳細な造営過程の解明にも取り組んでいきます。

今年は、奈文研が藤原宮第1次調査（朱雀門）を実施してから50年目にあたります。さらに、今回の調査は記念すべき飛鳥藤原第200次調査です。この調査にふさわしい成果を秋頃にはみなさまにお伝えできるように、夏の暑さにも耐え、鋭意調査を進めています。

（都城発掘調査部 道上 祥武）



東面回廊周辺に堆積する大量の瓦（北東から）